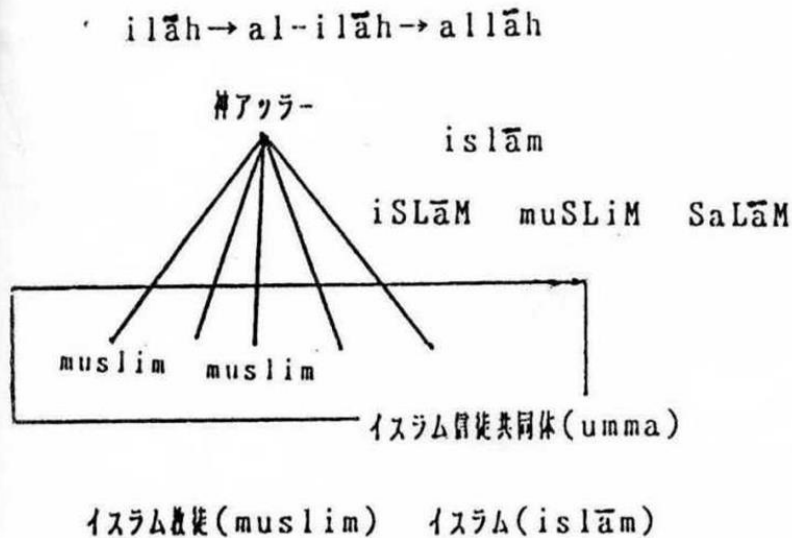


7. イスラムと政治

- (1) イスラムの政治構造
- (2) イスラム世界の権威構造
- (3) イスラムにおける宗教と政治：宗教と世俗
- (4) ジハードとは何か
- (5) 現代のイスラム原理主義者によるジハード論

(1) イスラムの政治構造



厳格な一神教的世界観

① 偶像崇拝の禁止

② 「聖」「俗」二元論の否定

- イスラムの政治は神政一致か？

一元論的立場に立つイスラムにおいて、原理的に見て、ヨーロッパ的な神政一致(テオクラシー)はあり得ない。

- イスラムの政治は「法による統治」

イスラムの政治は「法による統治」であるが、そこでの法(シャリーア)は実定法ではなく、基本的には啓示法である。

(2) イスラム世界の権威構造

- 信仰告白(シャハーダ)

la ilah illa allah, muhammad rasul allah

- 絶対的な宗教権威をもつヨーロッパキリスト教世界
- 絶対的な宗教権威をもたぬイスラム世界

(4) ジハードとは何か

コーランのなかのジハード

- それで不信者に従ってはならぬ、かれらに対し努力せよ、このコーランをもっておおいに奮闘努力せよ。(識別章52節)
- しかし、試練を受けた後に移住した者、それから奮闘努力し、またよく耐え忍んだ者に対し、なんじの主は、そのあとはきっと寛容者・慈悲者であられる。(蜜蜂章110節)
- 戦いがなんじらに規定される、だがなんじらはそれを好まない。自分のために善いことを、なんじらは嫌うかもしれぬ、また自分のために悪いことを、好むかもわからぬ。なんじらは知らぬが、アッラーは知りたもう。(雌牛章216節)
- なんじらは奮起して、軽くあるいは重く備えて出動せよ、そしてなんじらの財産と生命をささげて、アッラーの道のために奮闘努力せよ。もしなんじらが理解するならば、それがなんじらのために最も良い。(悔悟章41節)

⇒ジハードの原義:「努力すること」

⇒大ジハードと小ジハード

(5) 現代のイスラム原理主義者によるジハード論 ビンラーディンの宣戦布告文(1996年8月23日) 十字軍とジハード

- イスラームの民がシオニスト・**十字軍**連合およびその同盟者によって科された攻撃、不法、不正に苦しめられてきたことは明らかにされねばならない。ついにはムスリムの血は安価になり、彼らの富は敵の手のなかの戦利品となるにいたった。彼らの血はパレスチナやイラクで流されている。レバノンのカナでの虐殺の恐ろしい映像は依然としてわれわれの記憶に新しい。タジキスタン、ビルマ、カシミール、アッサム、フィリピン、ファタニ、オガディン、ソマリア、エリトリア、チェチェン、ボスニア・ヘルツェゴビナでも虐殺が起きており、それらは身体や良心を揺さぶるものである。世界はこのすべてを見て、そして聞いていながら、こうした暴虐行為に対し何ら反応を示していない。それどころか、アメリカとその同盟者たちのあいだの明白な陰謀で、不法な国連の傘のもと、これら抛りどころのない人びとはみずからを守るための武器を獲得することすら禁じられたのである。イスラームの民は覚醒し、彼らがシオニスト・**十字軍**連合の攻撃の主たる対象であることに気づいた。人権に関するすべての偽りの主張やプロパガンダは世界各地のムスリムに対し起きている虐殺によって論駁され、暴露されている。これらの攻撃の最大のもの、預言者－アッラーの祈りと平安がそのうえにあらんことを－が亡くなって以来、ムスリムが蒙った最大の攻撃は、二聖モスクの地、すなわちイスラームの家の基礎にして、啓示の場所、神託の根拠にして高貴なるカアバの場、すべてのムスリムのキブラ(礼拝の方向)がアメリカの**十字軍**とその同盟者たちによって占領されたことである。われわれはそれを嘆き、ただ「アッラー以外に何らお力はありませぬ」というのみ。(保坂修司『新版 オサマ・ビンラーディンの生涯と聖戦』朝日新聞出版、2011年、149-150頁)

バーナード・ルイス『聖戦と聖ならざるテロリズム』 (紀伊國屋書店、2004年、16頁)

- これを強調するためにビンラディンは、声明文でしばしば歴史的な出来事を取りあげる。もっとも劇的だったのは2001年10月7日のビデオだろう。ビンラディンは、イスラーム教徒たちが「80年以上にわたって」苦しめられてきた「屈辱と恥辱」について語ったのである。それではこの「80年以上」とは何を意味するのだろうか。欧米の多くの消息筋の人々は考えあぐねて、80年前のさまざまな事件をもちだしたのだった。ところがビンラディンが語りかけたイスラーム教徒たちには、それが何を意味していたかすぐにわかったはずだし、その意味をしっかりと受けとめたに違いない。
- さて、2001年から80年以上前、すなわち1920年前後に中東で何が起きていただろうか。何がイスラーム教徒に「屈辱と恥辱」を与えたのだろうか。少し歴史を振り返ってみよう。偉大なイスラーム帝国の最後を飾るオスマン朝のスルタンがついに決定的な敗北を喫したのは1918年のことだった。首都のイスタンブールが占領され、スルタンは捕虜になった。そして帝国の旧領土の大半は、勝利を収めたイギリス、フランスの両帝国の間で分割された。肥沃な三日月地帯にあったオスマン帝国のアラブ語地域は三つの新しい国に分けられ、それぞれに新しい国名と国境が定められた。